



朝鮮通信使の来日(1)

『第一回・慶長通信使』

齋藤弘征

不俱戴天の国

朝鮮国に甚大な損害を与えた文禄・慶長の二度に及び朝鮮出兵は、慶長三年八月、秀吉の死によって終わりました。秀吉の東アジア支配の野望は幻と消えたのです。この不条理な侵略戦争は、むごい殺戮と破壊を生み、いわれもなく蹂躪を受けた朝鮮人民、援軍の明兵そして出兵を余儀なくされた日本軍でさえ、その惨禍はすさまじいものがありました。被虜人となり日本に連行された朝鮮人の中には、奴隷として転売されイタリヤの人となった被害者もあり、秀吉の狂気じみた野心は、国をこえ民族をこえ身分をこえて、大航海時代という世界的な時代の流れとも相まって、地球的な規模で影響を及ぼしてしまいました。

理不尽に、突如日本軍に攻め込まれ全土を蹂躪された朝鮮の、日本に対する憎悪・怨念はすさまじく、朝鮮にとつて日本は不俱戴天ともに天をいだかざるの国となったのです。当然、先史時代から続いてきた対馬と朝鮮の交易も絶たれてしまいました。島が生きていくために、終戦と同時に対馬は修交の使者を出しましたが、誰一人生還する者はいませんでした。吉副左近、梯七太夫そして柚谷弥助等その知られた使者です。

国書偽造の果てに

「何としても朝鮮との修交を図らなければならぬ」という対馬の情念は、ついに実を結んだのです。慶長十年、藩主宗義智は外交僧玄蘇、柳川調信に僧惟政、松雲大師等朝鮮の使者を京都に案内させ、徳川家康・秀忠親子に伏見城で会見させること

に成功しました。日朝修交の兆しが見えたのです。これを受けて対馬藩は「時機到来」とばかりに日朝国交回復のための朝鮮通信使来聘へと動きまします。ところが、その交渉のために朝鮮に渡った使者橋智正(井出弥六左衛門)が朝鮮側から出された大変な条件を持ち帰ります。通信使派遣を要請する徳川家康の国書を先に朝鮮に出すようにというのです。いわゆる「先为国書」です。これは対馬藩にとつて大変な難題でした。国の威信がかかっています。家康が、先に国書を朝鮮に出すはずがありません。

そこで、何としても日朝の国交回復をしてほしい。対馬藩は、苦渋の決断をします。あるうことが「家康国書」を偽造して朝鮮王府に送ったのです。

朝鮮通信使の来日

こうして対馬藩の謀略は成功し、慶長十二年(一六八七)年二月、第一回朝鮮通信使(回答兼刷還使)が来日します。「家康国書」に対する回答と、先の倭乱で被虜人となった朝鮮の人たちを帰国させる使節です。

正使呂祐吉以下四六七名の使節一行にとつて、荒れ狂う海峡は苦難の航海でした。使行録「海様録」にその航海の様子が記録されています。それによると、二月二十九日、「…ようやく海の中ほどまで来ると、東風が大いに起り、向かい風が船を打ち、巨浪が天にも達するので水夫たちが氣勢をなくし、船が出没して傾き、上がる時は天に登る如く、下がる時は海底に入るが如くで、飛涛は雪を噴き出し、激しい波は雨のようであった。対馬島に向かおうとすると風波が打ちつけ、釜山に帰ろうとすると海路は既に遠く、進退兩難に陥りどうすることもできなかつた」と記されています。

船中は大混乱となり、泉のように浸水する水を

ぼる布で塞いでも効果はなく、なんとか沈没は免れたものの、船の中の水は一刻の間に肩を越す状態となった。日が暮れてやっと船は泉浦に到着しました。実は、一行が目指していたのは鰐浦だったのです。

始まった善隣外交

使船はその後、西泊浦、船越浦に停泊して三月三日、府中に到着しました。使船が到着するや、藩主義智は破損した船を見て、頑丈でないので対馬藩の手で修復することを申し出ています。三月十四日、「船の修理が終わわり、極めて頑丈になった」と、「海様録」にみえます。

一行は府中で料理や歌舞の接待を受け、三月二十一日江戸に向かいます。滞在のこの間、金石の館(金石城)の宴席で、対馬藩の「偽造国書」のことが話題に上っています。徳川政権下、その頃日本では使用されないはずの印章が使用されており、朝鮮側は先の国書は「対馬藩の偽造」を見破っていたようです。

初めて朝鮮通信使一行を護行した藩主義智等は、大任を果たし、使節一行は七月三日、釜山に無事帰着しました。江戸での国書交換の折、幕府は朝鮮側に、「…今後両国の間で互に通じることがあれば、対馬島をしてこれを為すように」と、朝鮮外交の日本側窓口を指示しています。なお通信使一行は、先の倭乱で捕虜になった者一、四一八名を刷還しました。江戸時代、日本の唯一の国家外交、善隣外交の大事業がこうしてはじまったのです(現在、「江戸時代は鎖国ではなかつた」とことが認識されています)。

このような対馬藩の努力は朝鮮側にも認められ、二年後の慶長十四年、対馬藩待望の交易を再開する「約条(己酉約条)」が結ばれました。

(対馬市文化財保護審議会委員)